

【論考】

# 信仰と文具

～紙をもちいた製品を中心に～

奈良女子大学 文学部

水野 亜美

〈目次〉

1. はじめに

2. 文房具と信仰

(1) 海外旅行での土産物としての文房具～台湾での個人的経験談～

(2) 天神信仰について

3. 紙と信仰

(1) おみくじについて

(2) 「紙」としてのおみくじ：和紙か西洋紙か

(3) 事例研究：おみくじの紙種について

(4) お守りの内符としての「紙」

(5) 事例研究：御札・お守りの内符の紙種について

4. おわりに

## 1. はじめに

文房具について思いを巡らすとき、「信仰」という言葉に行き着くことはあるだろうか。基本的に、文房具とは私たちの日々の生活に寄り添うものであり、「信仰」という非日常的なものには関係が薄いと思うことも当然かもしれない。しかし、受験に臨む際に「ご利益」のある文房具を用いたり、寺社でおみくじを引いたりといった経験は恐らく多くの人が持っているはずだ。そして、文房具の原点はいわゆる文房四宝（筆・墨・硯・紙）であることからすれば、おみくじに用いられている「紙」もりっぱな文房具なのである。本稿では、「信仰」に関わり深い文具を具体的に例示するほか、実際に関係する方々への調査で得られた結果などを含みながら、特に紙を中心として、信仰と文具の関わりについて考えていく。

なお今回は神事や神域・仏事や寺域そのものなどの場で使用・利用される紙や文具ではなく、私たちが入手しやすい信仰関係の製品について研究することとした。通常、信仰と紙といえば、「紙垂」を思い浮かべる方も少なくないだろう。だがすでに紙垂の材質等については“紙垂和紙”や“紙垂防水”といったキーワードを用いた検索で、比較的容易に情報を得るこ

とが出来る。今回本稿ではこの紙垂等ではなく、より知られることの少ない面を取り上げていきたい。

## 2. 文房具と信仰

ここでは、文房具と信仰の関係を考える一歩として、まず寺社での文房具にまつわる伝承などに触れていく。文房具と信仰という単語を並行して考えるとき、私たちの身近で実感しやすいのは「受験」を軸にした状況である。学歴が大きな意味をもつといわれる日本においては、受験期にさまざまな願掛けをする。勉強はもちろん大事なことだが、努力でなんとものならない「運」を引き寄せようという思いがそうさせるのかもしれない。

そもそも学業と、筆記用具つまり文房具は切っても切れない存在である。言ってしまうえば受験本番だけでなく、毎日の勉強においても受験生にとっては一種相棒とも呼べるほど文房具は近い存在だからだ。本節では、私個人の体験談としてまず海外旅行での土産物として販売されていた「ご利益」を持つ文房具に焦点を当てて紹介するほか、天神信仰についても取り上げていく。

### (1) 海外旅行での土産物としての文房具～台湾での個人的体験談～

私には、「文具と信仰」について興味深い体験談がある。2016年3月、私は中学校の卒業式を済ませ、高校受験も終えたばかりであった。合格発表までの期間が手持無沙汰だと考えたのだろうか。今思えば無謀さも垣間見えるが、その受験から合格発表までの数日を私は台湾旅行に費やしたのである。祖母と二人でのツアープランでの旅行だった。

台湾の名所を回るありがちなツアーで、年齢層がかなり高かった。唯一の若者だった私はツアー中、非常に可愛がられた記憶がある。旅程の中、私を含むツアー客全員はガイドの案内のもと、「日月潭文武廟」を訪れた。日月潭は台湾の天然湖で、台湾有数の景勝地として名高い。湖の北側が太陽の形に、一方で南側（特に南西）が月の形に似ていることから名前の由来であるようだ。この周辺にはいくつかの観光スポットがあり、その一つが先ほど述べた文武廟であった。文武廟は日月潭の湖畔北部に位置する台湾最大級の廟だ。廟は前殿、中殿、後殿といった造りをしており、前殿に「文」の神である「孔子が、中殿には「武」の神である「岳飛」や「関羽」が祀られている。そこを訪れた際に、私はあるシャープペンシルと出会った。それは「大事の際にしか使ってはならない、特別なシャープペンシル」だった。昔の科挙の試験の名残であったとか、そういった話を聞いたことを臆げに記憶している。高校受験を終えたばかりだった私は、「もっとはやくこのシャープペンシルが手元にあったらなあ」「次は大学受験に使うしかないのかなあ」など思考を巡らしていた。しかし、今思えば不思議である。いったいなぜ、鉛筆などではなく現代的なシャープペンにそのような物語や効果が宿ると説明されたのだろうか。残念ながら、あれからかなり時がたった今の時点で調べてみても、日月潭や文武廟に関する情報は見つかるものの、肝心のシャープペンシルに関する情報は一切出てこない。現地を訪れるしかもはや詳しく知る術はないのかもしれ

ない。



## (2) 天神信仰について

一方、日本で文房具とその「ご利益」について考えるとき、おそらく最も重要なキーワードが「天神信仰」であろう。まず、日本において文房具のご利益とは大抵が「学業」関連であることは疑いようのない事実だ。家内安全や安産祈願のご利益をもった文房具はなかなか見つけられない。考査の順位が上がりますように、落第点を取りませんように、通信簿の成績が上がりますように……そして、受験に合格しますように。こういった学業に関わる神頼みを「もの」として形にしたのが「お守り」であり、そして「ご利益のある文房具」なのである。そのお守りも、文房具も、量販店で購入するよりも神社仏閣で購入した方がより効果があるように人々は感じるだろう。

そして、それらを扱う神社の多くは天神信仰と関わり深いに違いない。「天神」とは、菅原道真を指す。天神信仰は菅原道真の霊をまつる信仰である。菅原道真は平安時代の貴族であるが、政治家や学者など様々な面を持っていた。菅原氏は代々学者の家であったようで、そこで生まれ育った道真は宇多・醍醐両天皇の信任を得て、文章博士や讃岐守などを歴任し

たのちには右大臣にまで昇進した。しかし、901年に藤原時平の策により太宰府に左遷され、やがて失意のうちに亡くなった。死後、朝廷や藤原氏に不幸が次いで起こった挙句に、天変地異まで起こった。それらは冤罪で左遷され、死に至った道真の祟りとして人々に恐れられた。そこで朝廷は993年、道真に正一位・太政大臣を送ったのである。道真の霊は時間の経過とともに、怨霊から「学問・芸能の神」へと変化していった。この信仰は「天神信仰」と一括され、多彩な内容を持ち、武士だけでなく、上層町人や知識人のあいだで広まった。天神信仰は江戸時代には「天神講」という信仰組織が生まれるまでに発展し、それを契機に民間に広まるようになっていく。寺子屋においても毎月25日が天神講とされ、その日には天神像の掛け軸を拝んだといわれる。(以上は、真壁俊信「天神信仰」・坂本太郎「菅原道真」ともに『国史大辞典』などを参考にした。)

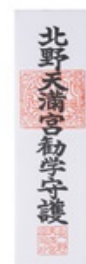


《東帯天神像》雲谷等顔筆  
江戸時代/17世紀

さて、現代において天神である菅原道真をまつた天神社・天満宮は全国に約一万二千社も存在する。その総祀（総本社）が、北野天満宮である。「天神さん」の名で親しまれる北野天満宮は、947年に村上天皇に命によって現在の京都府京都市につくられた。ここで道真は学問をはじめ、芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として祀られている。では、北野天満宮の学業に関わるお守り・お札や文房具を少し紹介したい。

北野天満宮の公式サイトによれば、学業に関するお守りは5種類、お札は2種類、そして文房具は1種類だった。お守りは[学業御守(桐箱入り)]に入試・試験合格・学力向上、[勸学守]に学力向上、[学業守]に入試・試験合格、星まもりの[青福]に成績向上、[技芸上達守]に芸術、習事などの技能向上。お札は[学業札]に入試・試験合格・学力向上、[勸学札]に同じく入試・試験合格・学力向上。そして唯一の文房具は[学業鉛筆]である。

学業鉛筆の説明として、「受験合格の願いを込めた鉛筆です。ご自身の目標に近づくための、勉学に励まれる学びの日々をお守りします。各本数入りのうち、半数は鉛筆の側面に菅原道真公の詩が刻まれ、半数は無地です。芯の濃さはHB。」とある。



左から：北野天満宮：学業御守（桐箱入り）

学業鉛筆

勸学札

### 3. 紙と信仰

文房具と信仰の関係を改めて考えた時、話題になりやすいのはやはり、前述したような「合格祈願」などといったご利益を得るための文具だろう。しかし、これら、ご利益があるシャープペンシルや鉛筆、消しゴムなどといったものの他にも信仰に関わり深い文具が存在する。それは、「紙」だ。

はじめにでも少し触れたが、いわゆる文具四宝あるいは文房四宝とは「筆」「墨」「硯」「紙」のことを指す。中国で文人が書齋で使用する文房具である。古来、中国では文人の書齋を文房と呼んだが、やがて「文房」はそこで用いられる器具の呼称ともなったと言われている。また、この「文具四宝」を「筆」「墨」「硯」「紙」とする記述が初めて書物に見られたのは、宋の時代の葉夢得撰『避暑録話』の二巻である。とはいっても、日常的に私たちが触れている紙とは少し性質を異にするものに注目していきたい。ここで話題にしているのは、具体的に言えば寺社で「おみくじ」に使用されるような紙と、「お守りの内符」に使用されている紙であるからだ。お守りの内符を取り出すことは、罰当たりのような感覚が一種伴うため、これに関してはそもそもお守りの中身が何であるかを知らないこともありうるだろう。一方、おみくじを引く、という行為はおそらく多くの人が一度は経験があることだろう。その瞬間を思い出していただきたい。どのような感触であったらう？科学的・専門的な材質に明るくない私が最初に考えたのは「和紙の一種のような気がする」といったものだった。それでは、はたして「お守りの内符」や「おみくじ」に使われている紙はどのようなものであるのか。

#### (1) おみくじについて

わたしたちが思い浮かべるおみくじはもちろん紙である。しかし、おみくじの歴史について考えると紙以外でできたおみくじも少なくない。日本国内で考えてみれば、おみくじというものを概念として捉えた時、『古事記』や『日本書紀』、『万葉集』といった史料にその片鱗がうかがえる。古代の日本では、呪術の一種として、鹿の骨や亀の甲羅を用いた太占の法や亀卜が行われていた。これらの目的は「占い」であるが、占いとおみくじの親和性は高い。なぜなら、どちらも未来の出来事を色々な意味で知ろうとする点で共通しているからだ。しかし、この記紀万葉の時代におみくじによる占いが行われていた証拠は存在しない。史料の上で、「おみくじ」と明らかに判定できるものが現れるのは飛鳥時代後期である。『日本書紀』の斉明天皇四年（658年）11月の有間皇子謀反事件の項で、「短籍を取りて、謀反けむことを卜った」との記述がみられる。「短籍」とは、短冊状の細長い木片や紙片のことを指している。この木片や紙片を複数用意してそこになにか文字をしるし、謀りごとの首尾を占ったという記述のようだが、これはあきらかに「おみくじ」の原型である。ここから時代が下り、鎌倉から戦国時代では神仏とおみくじの関わりが強くなっていく。現代のおみくじも神仏と深く関係があるが、この時代のおみくじとの大きな違いは「占いをするものが基本的に目的にそって自作」していた点である。長らくこういった形式であったおみくじが、現代の姿

に近づく転機は平安時代の後半であった（本段落は中村公一 1992：158～207 を参考にした）。

国文学者の平野多恵氏によると「おみくじは従来、学問的に研究されることが少なかったが、ここ二十年ほどで漢詩みくじの代表である元三大師御籤を中心に研究が進展した」という（平野 2016：3）。この元三大師とは、平安時代の天台座主の慈恵大師良源（912～985）のことであり、比叡山延暦寺横川の元三大師堂（四季講堂）にまつられる高僧である（参考：同堂渡邊恵淳當執事による由来：<https://1200irori.jp/content/interview/detail/guests10>）。

おみくじは、「漢詩・和歌・それ以外」に分類できる（平野 2016：4）。この平野論文の主題は和歌が記載されたおみくじについてであるが、漢詩のおみくじについてはつぎのとおりであるという。「南北朝時代に中国から日本へもたらされたものである。観音菩薩のお告げとされる五言四句の漢詩による『天竺靈籤』が観音籤として寺院で受け入れられた。この観音籤は、江戸時代に徳川幕府に重用された大僧正天海が天台宗中興の祖である慈恵大師良源を信仰していたことから、観音菩薩の化身とされた元三大師と結びつき、いわゆる「元三大師御籤」として大いに流行した。十七世紀後半の寛文・延宝年間（一六六一～一六七三）以降には多くの刊本が出版された。（中略）この「元三大師御籤」は、江戸時代までは寺院だけでなく神社でも多く用いられていた」（平野、同）。

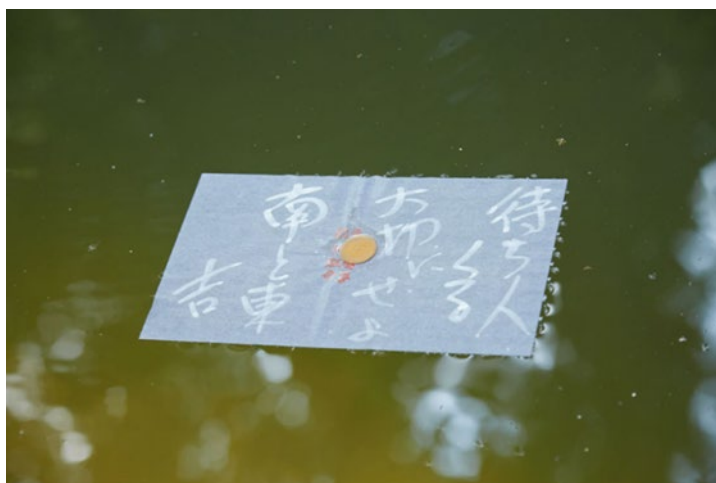
この元三大師観音籤の第1首（第一番）の籤詩を以下に紹介する。

第一 大吉 七宝浮図塔（七宝の浮図の塔）  
高峰頂上安（高峰頂上に安んず）  
衆人皆仰望（衆人皆仰ぎ望む）  
莫作等閑看（等閑の看を作す莫れ）

〔大意〕七宝で飾った仏陀の塔が（七宝とは金・銀・瑠璃・瑪瑙など七種の宝石・貴石。浮図は仏陀〔サンスクリット語の悟れるもの buddha〕に同じ。塔はサンスクリット語の stupa〔卒塔婆・塔婆〕の略で、石や磚〔素焼き煉瓦〕を積んで、高く見えるように作った仏陀の墓・靈廟）、/ 高い峰の上にそびえたっている。/ もろ人はみな尊い仏陀の塔だと、あおぎ見るが、/ その尊い塔を、ただ美しいとか立派だとかだけで、なおざりに見てはならない。  
〔解〕このみくじを得たるものは、威勢強く万人に尊敬される。ただし頂点を極めた形なので、何ごとにも自重して行動すべし（中村 1992：269 による）。

さて、こういった由来を持つおみくじであるが、特殊なものも少なくない。例えば、島根県の松江に位置する八重垣神社をご存知だろうか。ここ八重垣神社におけるおみくじは、かなり特殊である。「鏡の池の縁占い」といって、八重垣神社の奥の院、鏡の池で行ういわゆる「水占い」だ。池に占い用紙を浮かべ、十円や百円などの硬貨をその上にそっと乗せる。もしも十五分以内という比較的短い分数で沈めばその人には縁が早くやってきて、三十分以上という比較的長い分数をかけ沈むとその人には縁が遅くやってくるのだという。また、池に浮かべた位置から近くで沈むならば自分の身近な人、遠くで沈むならば遠方の人と縁

があると伝えられている。恋愛、結婚等の縁に限らず色々な縁や願い事、また代理で他の方を思いながらの占いもできる。この占い用紙は一枚百円で、神札授与所で手渡されるのだが、特殊な紙を用いているようで水に触れると文字が浮かび上がる（下図参照。同神社ウェブサイトより）。



おみくじという名前ではないが、お告げが示されるという性質からこの縁占いはおみくじの分類としてよいだろう。この他にも、同じく「水占みくじ」を扱う貴船神社や紙筒に入った複数のマッチを穴から出し、その色で吉兆を占うユニークな「おみくじ燐寸」を扱う熊野若王子神社、「清めおみくじ」という節分の日

にしか表に出ない願意書にあぶらとり紙が付随するおみくじを扱う須賀神社などにみられるように特徴的な紙を用いるおみくじも少なくない。ただ、今回はそういったおみくじからは離れ、一般的な用紙を用いたおみくじを考える。

## (2) 「紙」としてのおみくじ：和紙か西洋紙か

まず重要なのは、おみくじに使用される紙が、意外にも「和紙」ではなく実は「西洋紙」が全体のうち大きな割合を占めるという点である。現代において、おみくじの紙の生産シェアのなんとおおよそ七割がある会社によるものである。1940年代、1950年代にはこれほどのシェアを占めてはいなかったようだが、その注目すべき会社の名前は女子道社という（次ページの図も参照）。先ほどの元三大師の「観音籤」から時代は下り、この女子道社が考案し、生産を始めたのは今も私たちが触れることが出来るような「和歌みくじ」だった。この和歌みくじはもともと日本の神々の「神語」に基づく和歌をみくじに記したことに始まり、その序文では日本古来の神による「神籤」であることが強調された。

山口県の周南市鹿野の地に位置する女子道社は、その隣にある二所山田神社が設立した株式会社である。（以下、同社に関しては、今回お話をうかがうことができた詳しい方〔山口県在住。お名前は伏せ、以下、Aさんとさせていただきます〕と平野 2016：11 に拠る）。明治時代の二所山田神社宮司であり明星派の歌人でもあったという、宮本重胤が考案し、始めたのがおみくじの生産だった。この頃は男尊女卑の風潮が強かったが、重胤は『神道は女性を穢れとはみなさない』という根拠から女性の自立支援を試みた。彼は熱心で、今でも困難な女性神主の登用まで意見したという。明治三十八年（1905）に重胤は日本敬神婦人会を設立する。また、明治三十九年（1906）以降に、日本敬神婦人会の機関紙である「女子道」を発行するための資金集めを目的におみくじ生産を開始した。これは月刊で、大日本敬神婦人会

の発会 5 周年を記念して明治三十九年から昭和十七年まで発行された。「女子道」は神道の普及を目的として発行されたが、多彩な編集が目目を引いた。よって、地域広報的色彩を持ち、広く読まれたという。

図：官報 1922（大正 10）年 9 月 6 日の広告欄にみえる女子道社

[自動のおくじ箱を宣伝するとともに、御籤紙カタログ進呈とある]

しかし、第二次世界大戦の末期にしかれた統制令のもと、国から廃刊命令が下ったのである。近所の村や集落の女性を集め、彼女らに手作業でおみくじを生産するよう依頼した。印刷以外が現代でもすべて手作業で行われており、鹿野地域の地元主婦の内職としてみくじ作りが定着した様子がうかがえる。変動はあるようだが、常時 60 人がみくじ作りを行い、秋から年末にかけての繁盛記には 100 人近くもの女性がこの作業に携わる。その工程だが、おみくじ用の紙にはすでに九枚のおみくじ分が印刷されており、その紙をまずは折る。紙の端に糊付けをし、その後くじの幅に合わせて裁断機で切り分けていくのだ。この裁断は「押し切り」と呼ばれるらしい。

このように業界シェアの大きな部分を占める女子道社をはじめ、おみくじの紙には先ほども触れたように、和紙ではなく西洋紙が使われる。その理由は和紙の性質にあると考えられる。このあたりの事情に関しても、上述の A さんのご教示をえた。A さんによると、和紙には印刷機のローラーに繊維が引っ掛かりやすく、紙くずも付着しやすいという特徴がある。その結果、ゴムの車輪からなるローラーの刻み目に紙が入り込み、スリップして空振りを引き起こすそうだ。そしてこれが、印刷効率の悪化につながるのである。このような事情で、近年の一般的な印刷機ではどうしても西洋紙が選ばれることになる。このお話を A さんからうかがって、筆者なりに調べたところ、その種の印刷機であえて和紙の印刷をしようとすればかなりの工夫が求められることになるようだ。おみくじ云々に関わらず、そもそも



和紙印刷には問題点として見当ずれや色ずれ・紙ムケが発生しやすい。色や諧調の再現性に劣る点があり、写真や複雑な絵柄の転写も困難であるなど、一般的な印刷機による和紙印刷には多くのハードルがあるようだ。

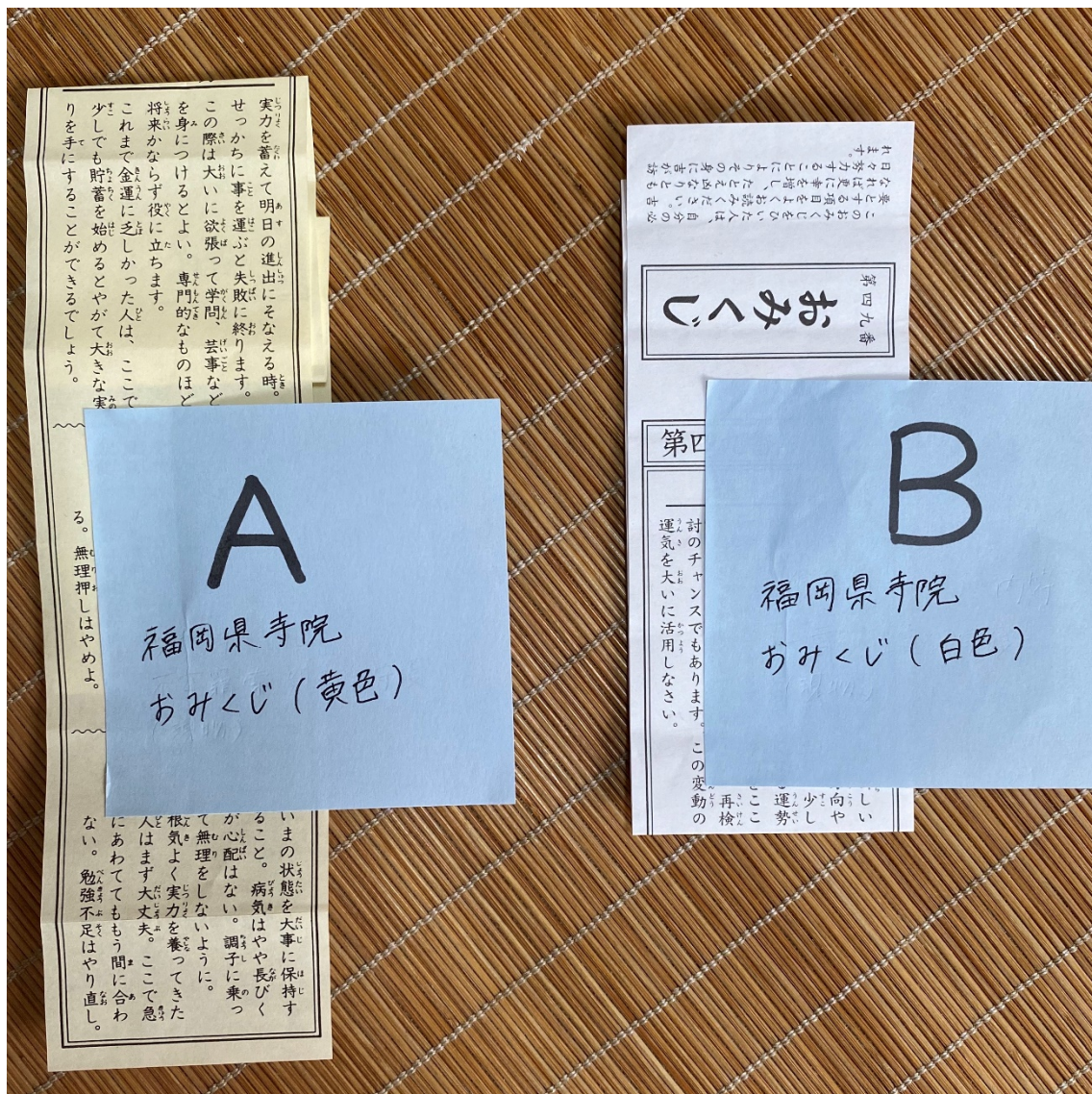
このような事情からおみくじには和紙よりも西洋紙が好まれるという結果にも納得がいく。おみくじや護符といった和風のものには、やはり和紙が用いられやすいのではないかと当初は予想していた。しかし、そういった文化的な根拠による選択ではなく、より技術的な理由によって素材が選ばれる傾向があるということが今回知識として得られ、大変興味深く感じた。では、具体的に実際におみくじに使われる紙などはどういったものであるのか。この点を以下の観点で検証していく。

### (3) 事例研究：おみくじの紙種について

今回、福岡県にある寺院のご厚意を賜り、研究の趣旨をご理解の上、おみくじのサンプルを頂戴することができた。さらに、そのおみくじのサンプルを紙の専門家の方に材質の判別をしていただく機会にも恵まれた。その結果、二種類の異なるおみくじの材質を詳しく知ることが出来たので、以下に示させていただきます。紙種の判別にご尽力くださったのは、大阪紙製品工業会専務理事の寺村聖一氏と、氏からの調査依頼に応じてくださった紙専門商社の方々である。

なお、紙の材質や種類などに関してよりよく理解するには、一定の基礎知識が必要である。幸い今回は寺村氏がいくつかの資料を提供くださったので、その URL や文字起こししたものを本稿末に【参考資料】として掲げさせていただいた。ご参照いただきたい。

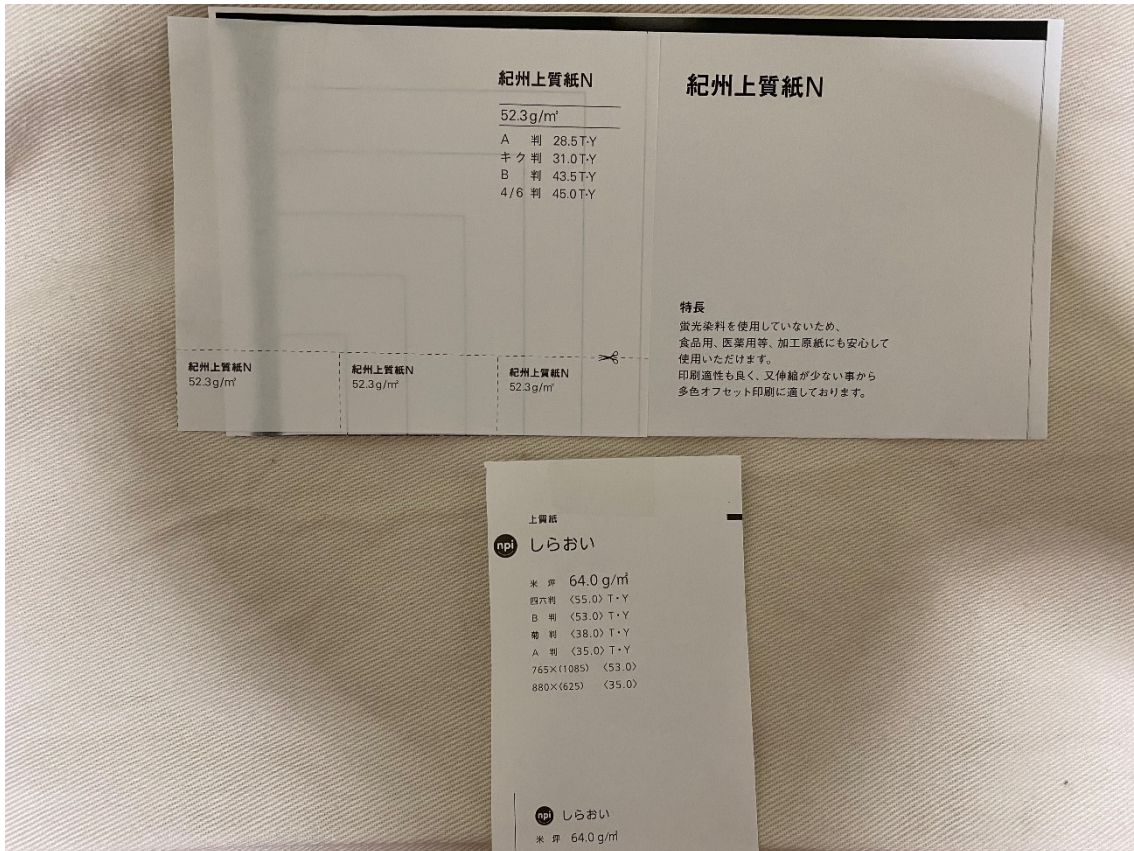
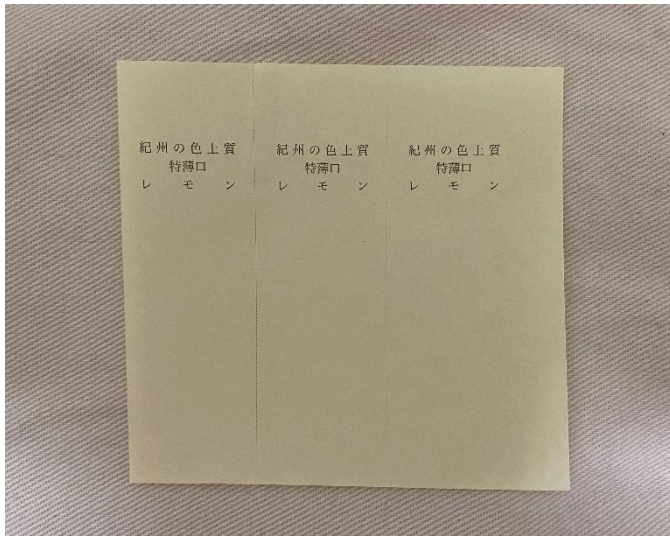
さて今回、紙種の判別をしていただいたのは次ページの二種類のおみくじである。



まずは A、と便宜上名付けた黄色のおみくじから見ていきたい。こちらは色目を手掛かりに紙の銘柄特定を行っていただいたところ、「北越コーポレーション紀州色上質紙レモン特薄口」だと判明した（上質紙については巻末の参考資料2参照）。

また、もう一方の B、と名付けた白色のおみくじにはまずブラックライトによって蛍光反応が調べられ、反応がないことから無蛍染紙と断定された。この時点では候補が複数存在した。「日本製紙しらおい」と「北越コーポレーション紀州上質紙 N」である。次いで蛍光反応の比較が行われた結果、前者すなわち「しらおい」との推定結果となった。

寺村氏からお送りいただいた三種の紙の見本写真を以下に掲げる。



#### (4) お守りの内符としての「紙」

次に、お守りの内符として利用されている紙に注目した。そもそも、お守りの内符にいくつか種類がある、ということはあまり知られていない。以下ではふたたび、Aさんにお教えいただいた内容を軸に、金刀比羅宮の御守に関する田山弘子氏（東和奉産株式会社常務取締役）の『笑顔元気くん守り』の出来るまで!! ([http://www.konpira.or.jp/charm/how\\_good-](http://www.konpira.or.jp/charm/how_good-)

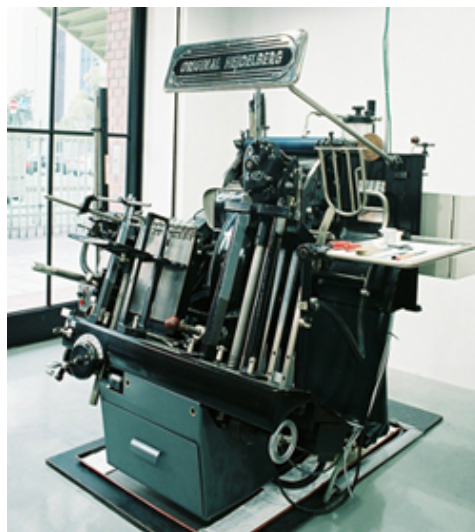
[luck\\_charms\\_came\\_to\\_be\\_made\\_02\\_sx.pdf](#)) などいくつかの神社仏閣に関する情報も加味しながら、内符やその紙について触れていきたい。

まず、内符というのはその名の通り、お守りの内部に封入されているものを指す。この内符が今回取り上げるような紙でできた御札であるお守りもあれば、同じ御札ではあるが板や錦からなるものが内符となっているお守りも存在する。その他にも、木製の御札や和紙と木板の組み合わせから成るもの、さらには偶像や勾玉を内符とするお守りもある。

内符が紙でできた御札である場合、その印刷などの流れはおみくじとは異なる点が出てくる。おみくじの場合には、先述したように基本的には西洋紙を原料とする既製品のおみくじを神社仏閣が購入している。そのため、水占いなどといった特殊なおみくじ以外は、複数の神社仏閣で同じおみくじが置かれていることも珍しくないという。一方、お守りの内符としての紙にはそれぞれの神社仏閣ごとに違いがみられるのである。一見してどこの神社仏閣のお守りの内符も、同じような紙だと感じる可能性もある。しかし、実際にはその神社仏閣で脈々と受け継がれてきた固定の形や寸法などが存在する。つまり、お守りの内符の紙は大昔から変化せず、長い時間がたとうともある一定の基準に従って作られている。

お守りの内符である紙も、おみくじと同じく独自で生産をしている神社仏閣は少ないという。昔から決められた固定の形や寸法などの形式をもとにした注文を受ける中継ぎ業者と、それらの生産を行う印刷業者が存在するのだ。Aさんのお話では、現在そういった印刷業者は家族単位での経営を例として規模が小さくなっている状況であるようだ。

また、先ほど述べたとおり、和紙の印刷にはかなり問題点がみられる。これら問題点を抱えた和紙印刷に有効であるのが、西ドイツのハイデルベルク社が1960年代に生産していたという「活版印刷機プラテン」である。活版印刷とは、凸版印刷のひとつでもあり、また古くからの印刷技術である。印刷方法は大きく二つ存在し、一つは活字と呼ばれる鉛でできた文字を拾い集め組み合わせる方法である。またもう一つは金属や樹脂の凸版を作って印刷する方法だ。凸面にインクを載せ、圧力をかけることにより紙にインキを転写させる。この過程で圧力がかかることによって紙に凹みが生じる。



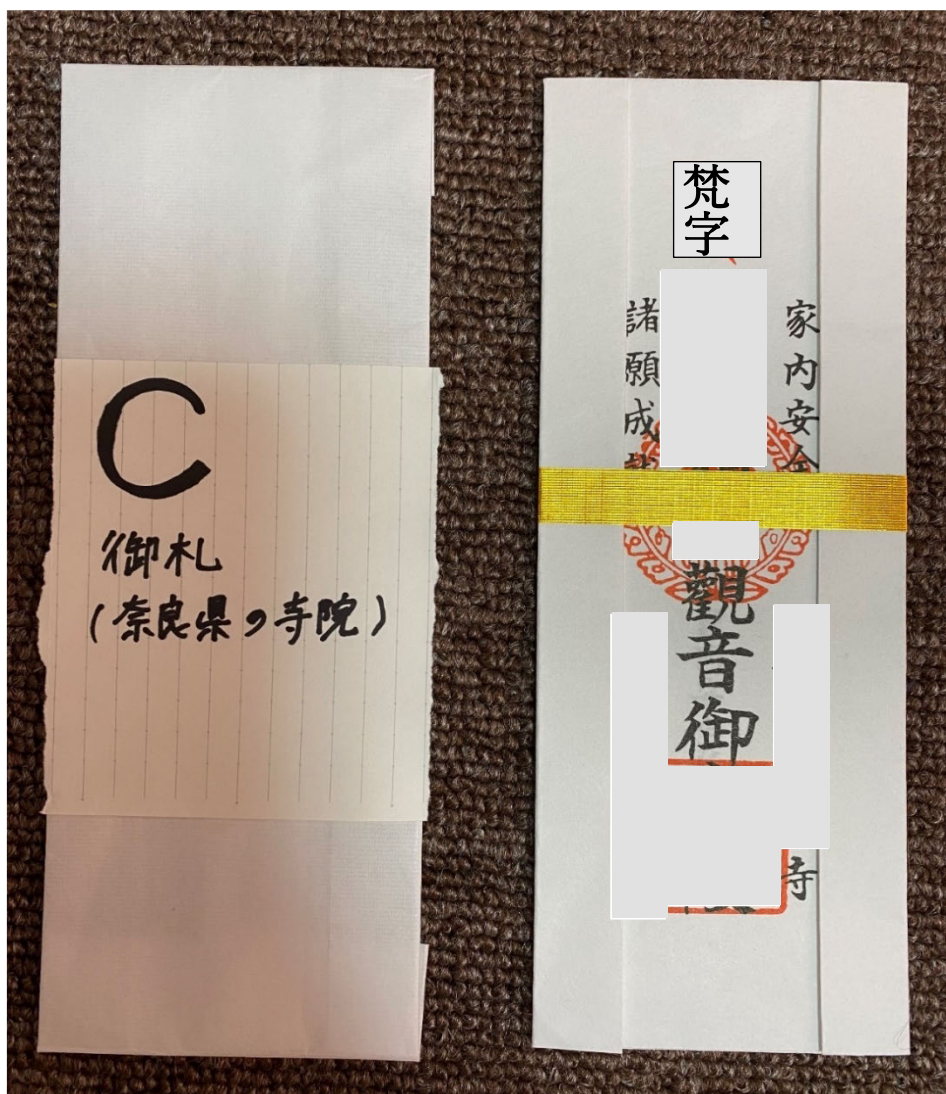
活版印刷機プラテンT型  
あさひ高速印刷株式会社所有  
同社ウェブサイト 2013年4月11日  
お知らせ記事より

[https://www.agmedia.jp/news/2013/04/post\\_2.html](https://www.agmedia.jp/news/2013/04/post_2.html)

印刷をするにあたって、印刷物の形状にあまり制約を持たないというプラテンの特徴が和紙印刷に都合がよいのだという。しかしながらこのプラテンはすでに生産が中止されており、今ではこの印刷機を擁する印刷業者も数少ない。その影響もあり、お守りの内符を生産する印刷業者の数も少なくなっているようだ。

#### (5) 事例研究：御札・お守りの内符の紙種について

そこで今回は、おみくじの紙種の判別につき、奈良県の寺院の御札とお守り（\*）について、それぞれ紙種の判別も専門家に依頼した（\*寺院からの提供ではなく、本研究のために購入させて頂いたもの）。その結果、材質について詳しく知ることが出来たので以下に示す。なお、お守りや御札は信仰の対象であり、中身を取り出すことには躊躇があったが、いい加減な気持ちの興味本位ではなく研究目的であるためご理解いただきたい。



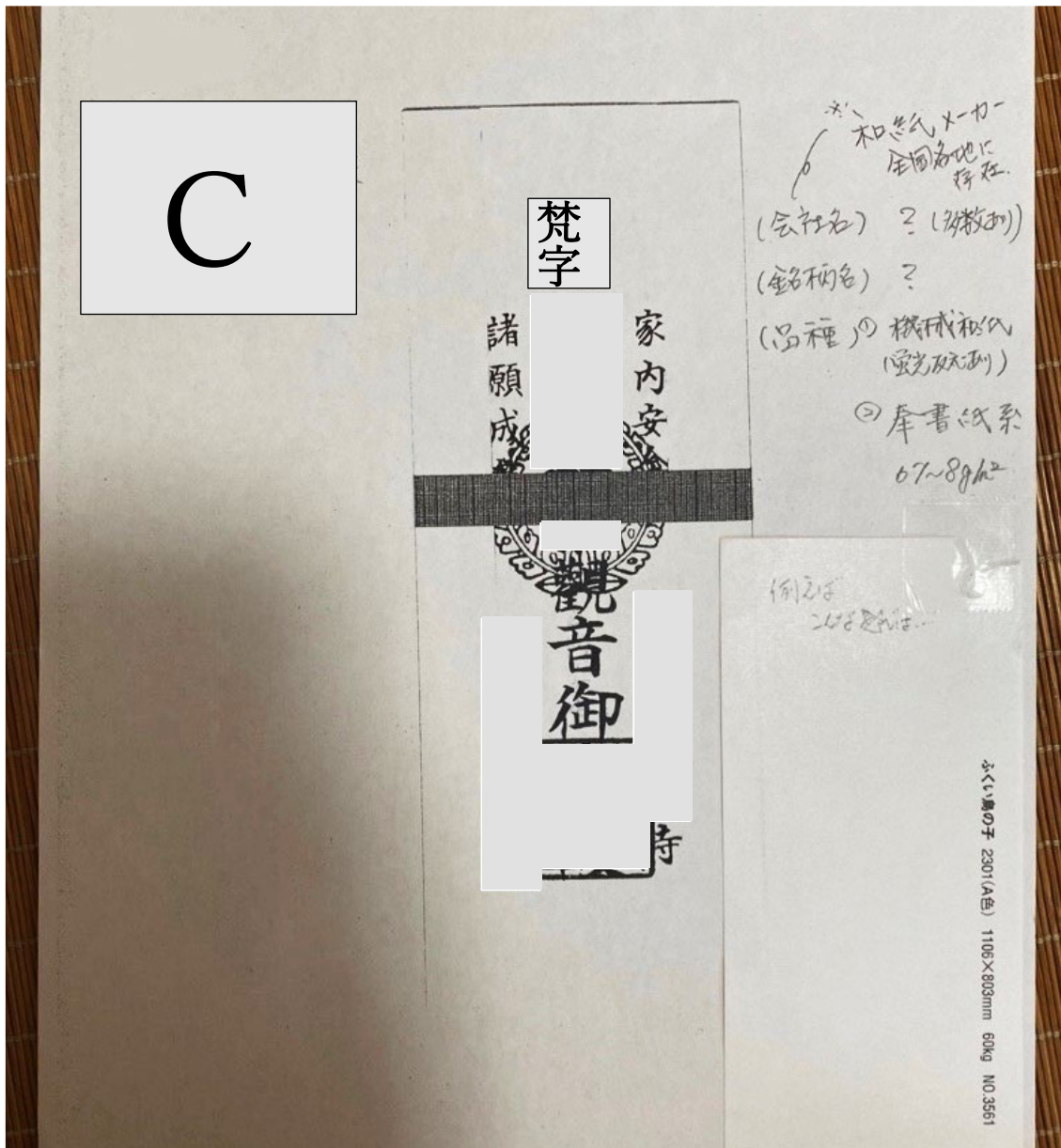
各図中「梵字」としたのは、一文字の梵字が刻印された部分

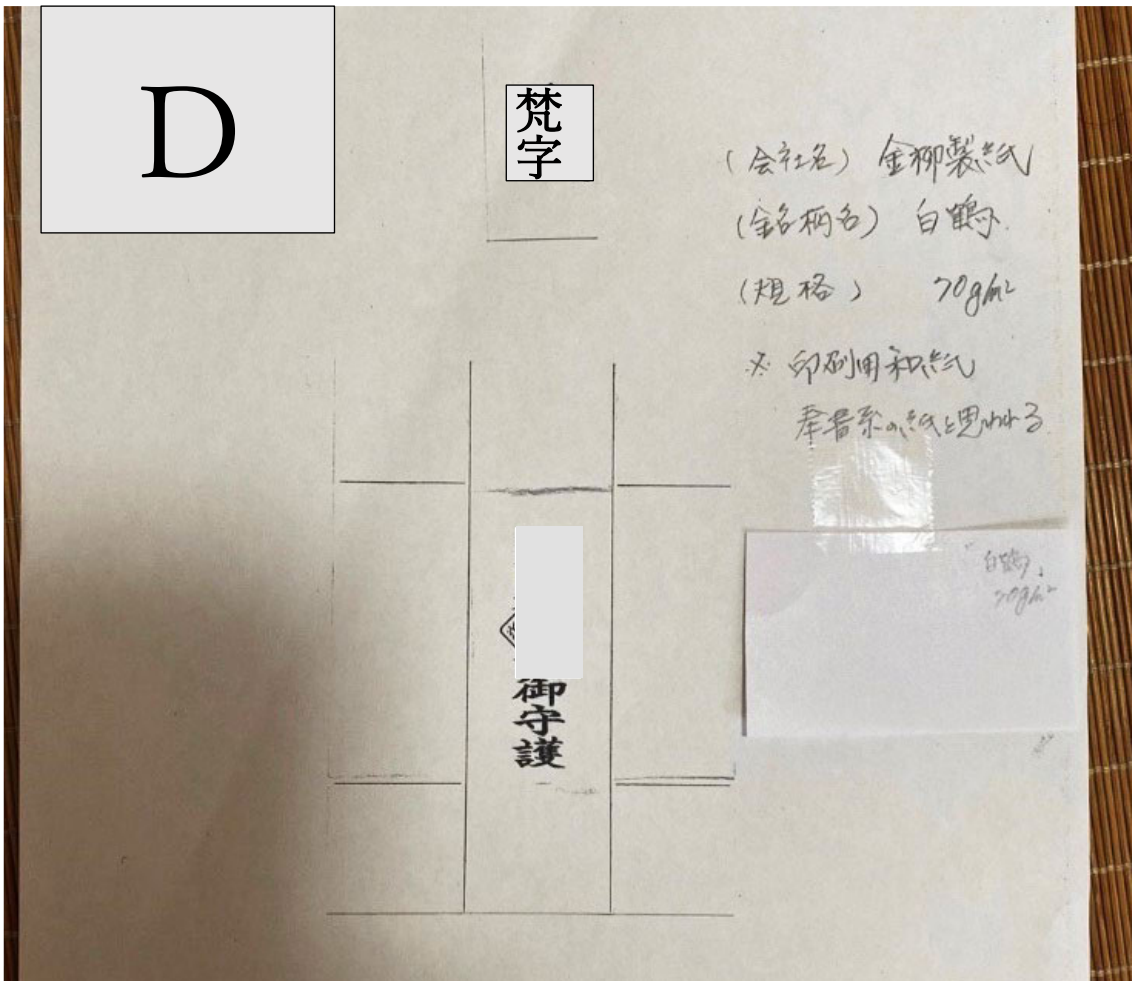


まずは、便宜上 C と名付けた御札をみていく。こちらは紙の特定に難航された結果、機械抄きの奉書紙ではないかという推定がなされた。和紙メーカーが全国に存在するため、会社名や銘柄の特定は困難であるが、品種としては、蛍光反応があったため①機械抄き和紙であり、②奉書紙系 (67~68g/m<sup>2</sup>) ではないかとのことである。例として「ふくい鳥の子 2301 (A色) NO.3561」の見本をご提供くださった。

また、もう一方の D と名付けた御守の内符について、こちらも C の御札と同じく奉書系の印刷用和紙と考えられるようだ。蛍光反応や地合、手触りなどを基準にして判定した結果、金柳製紙という製紙会社の「白鶴」銘柄 (70g/m<sup>2</sup>) ではないかとの推定結果が出た。これについても見本をご提供くださった。

上記の諸点を寺村氏からご回答いただいた調査結果を以下に掲げる。それぞれの紙の見本も添付してくださっている。





以上、護符・お守りに関しては、おみくじの材質調査とはかなり異なる結果であった。しかしこれは、Aさんのおみくじと護符・お守りでは重要とされるものが異なるという趣旨のお話を基準に考えれば、結果に納得がいくところである。

そして、おみくじと御札・お守りに期待されている役割の違いも関係していると私は考えた。おみくじも御札・お守りも信仰に関り、神社仏閣に置かれていることには変わらない。けれどもおみくじは、御札・お守りのように「そのもの」の存在自体が効力を発揮する（＝ご利益がある）わけではない。例外として、「大吉」であったおみくじを持ち歩く人が一定数存在することは挙げられるが、それを除けば基本におみくじの紙そのものに効力が期待されることはなさそうだ。つまりおみくじに関して言えば、紙にではなく、そこに綴られた言葉こそに意味があるのである。言葉を受け止め、心にとめて過ごすことに意味があるのだ。紙としてのおみくじそのものにはそこまで意識が向けられない。

一方で、御札やお守りの場合、そうはいかない。「そのもの」自体にご利益があると信じられ、一年後の返納の時期などまでは手元に置かれるからだ。よって、日本の伝統的な和紙



が利用されていると考えることが出来る。

なお、和紙への印刷の難しさを"おみくじ"の項で取り上げたが、御札やお守りでは、和紙に印刷がなされている。しかし、今回の判定結果で印刷用和紙というものがあることを知った。また、一般におみくじは文字数がかなり多く文字のサイズも極小だが、御札やお守りでは文字が大きく文字数も少なめなので和紙への印刷がしやすいのかもしれない。

#### 4. おわりに

「文房具と信仰」という観点で今回身近な存在である文具、特に「紙」を捉えなおした。実際、「紙」を文房具としてみなすことに私自身、初めは違和感を抱いていた。しかし、「紙」のなかでもおみくじ、御札やお守りの内符といったものに注目し、またそれらに関わる知識を得るにつれてその感覚は徐々になくなっていった。「紙」は古くから私たちにとって文房具であり、その事実はこれからも変わらないのである。デジタル化が急速に進み、科学的な知識が大衆に広まった現代では「紙」も「信仰」も昔ほど人々にとって存在感の大きなものではなくなりつつあるのかもしれない。しかし、私は長い間人間に寄り添ってきた「紙」も「信仰」も、なくてはならない存在であると感じている。紙媒体の書物が今もなお人々に親しまれ、困ったときについ神頼みしてしまう理由は明確には説明しづらいが、事実としてあるのだ。

今回「信仰」というキーワードから文具について研究をすすめたが、やはり身近なテーマでない分初めて触れる事柄も多く、非常に興味深いことが多かった。あまり一般的に知られていないものについて知ることは私の世界を広げてくれた。自分が得た新しい視点や知識を生かし、今後も本件についての考察を深めていきたい。

#### 【謝辞】

このたびの研究にあたり、研究の目的を了解の上おみくじのサンプルをご提供くださった福岡県の寺院さまと、貴重な情報を何度にもわたりご教示くださった A さまに感謝いたします。また、資料の紙種の判別調査に快くご協力いただいた大阪紙製品工業会専務理事の寺村聖一氏、並びに紙専門商社の方々にも感謝いたします。ありがとうございました。

#### 【参考文献】

- 平野多恵 (2016) 「おみくじの近代：和歌・明治維新・新城文庫『おみくじ集』」、『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』 2 巻、3-20 頁
- 宇津純 (1992) 「元三大師とおみくじ」(仏教民俗学大系 8 『俗信と仏教』 名著出版)
- 中村公一 (1999) 『一番大吉！おみくじのフォークロア』 大修館書店
- 大野出 (2009) 『元三大師御籤本の研究—おみくじを読み解く』 思文閣出版
- 大平一枝・小林紀雄・小林キユウ (2006) 『かみさま』 ポプラ社

## 【参考資料】

大阪紙製品工業会専務理事寺村聖一氏提供の情報・文献を  
こちらで文字起こしなどしたものです。

### ■資料1：紙の歴史

下記サイトは、「1.紙の誕生前、2.紙の誕生、3.紙が日本に伝わる、4.洋紙の発達、5.現在から未来へ」という5項目で紙の歴史がわかりやすくプロの立場から説明されているものです。「紙の歴史」平出紙業株式会社：<http://www.hiraide-paper.com/history/>

(最終閲覧 2020. 08. 19)

### ■資料2：上質紙

上質紙とはなにかについて、今回の紙種の判定を理解するためにも必要な基礎知識です。

#### 2-1

##### 5. 2. 1 非塗工印刷用紙

###### (1) 上級印刷紙

###### 「①印刷用紙 A

一般に上質紙と呼ばれ、書籍用紙、教科書、紙製品、ポスター、商業印刷、一般印刷の各種印刷物など、日常よく使われる品種である。印刷用紙の代表で汎用性に富み、化学パルプを100%使用した非塗工紙の総称で、上質紙、イミテーションアート紙、模造紙などを含む。規格品の坪量は52.3~209.3g/m<sup>2</sup>だが、通常の品揃え定坪量の範囲は52.3~157g/m<sup>2</sup>で、209.3g/m<sup>2</sup>は少なく、また、製品形態は平判、巻取紙があるが、その多くは平判である。印刷用紙 A の96年生産高は約100万tで、上級印刷紙に占める比率は81%と高く、伸び率は8年前と比較して約140%とあり、かつ非塗工印刷用紙の中では最も量が多く、ウェイトの高い品種である。

ところで、イミテーションアート紙とは、塗工紙であるアート紙まがいにするために、パルプに多量のクレーなどの填料を配合して作られたスーパーカレンダー仕上げの強光沢を有する非塗工印刷用紙のことで、高不透明度で、印刷適性が良いといった特徴がある。また、模造紙は、化学パルプのみで抄造した印刷、筆記、伝票などの事務用品および包装などに使われる上質の用紙で、分類上、スーパーカレンダー仕上げすることで高光沢・高平滑をもたせた A 模造紙と、マシンカレンダーだけで処理をした B 模造紙とがあるが、実際に市販されているのは A 模造紙だけである。坪量は30、35g/m<sup>2</sup>の2種類で、34g/m<sup>2</sup>以下を薄口、35g/m<sup>2</sup>以上を厚口と区分している。

なお、「模造紙」という名には、次のような由来がある。1878(明治11)年のパリ万国博覧会に、わが国の大蔵省印刷局が三桎(みつまた)を主原料とした高品質の特製紙「局紙」を出品。局紙の品質は非常に好評で売れたが、価格が高かったため、ヨーロッパでは、亜硫酸パルプ(SP)を原料に、これに似せた紙を作った。これが日本に輸入されたが、局紙を模造した紙であることからこの名がつけられた。さらに1913(大正2)年に、九州製紙(株)が、評判の良かったヨーロッパ製の輸入紙(局紙の模造紙)を真似て、亜硫酸パルプを使って製造し、スーパーカレンダー処理を行ったのが、わが国の「模造紙」生産の始まりであ

る。

印刷用紙 A は、中質紙に対して上質紙といわれることが多い。上質紙は洋紙のなかの代表的品種で、汎用紙の 1 つである。用語上は、「化学パルプだけで製造し、印刷、筆記などの用途に用いる紙」となっており、広葉樹パルプを主体とした化学パルプ 100%に、填料を 15%前後配合(あまり多くすると、しなやかになり過ぎ、腰のない紙になる。逆に少なすぎると不透明度が低くなり、裏の印刷が透けてみえる)したもので、マシン仕上げが一般的であるが、スーパー仕上げのものもある。表面は平滑で、均等で白色度も高く、(4色)オフセット印刷が可能で、しかも万年筆などのインキが滲まないように適度にサイズ処理されており、筆記適性が付与されている。用途は広範囲にわたるが、主として書籍本文、雑誌の表紙、カタログ、カレンダーやチラシなどの商業印刷物や筆記用紙などに使用される。」

(出所：王子製紙株式会社 中嶋隆吉 『紙 一紙と印刷、品質クレームへの対応一』  
22 頁、出版年未詳)

## 2-2 :

### 5. 2. 2 印刷筆記図画用紙

#### 1)非塗工紙

##### 「a)上質紙

上質紙には、前記分類表(省略)の中で、印刷用紙 A・筆記図画用紙が含まれ、広義にはその他印刷用紙も含まれる。

上質紙は、印刷用紙の代表品種であり、汎用性が高く、書籍、教科書の本文用紙をはじめとする出版用途、カタログ、ポスターなどの印刷用途にそれぞれ広く使用されている。なお市況もこの上質紙を基準として形成されている。

原料は、広葉樹(L)の BKP100%が一般的であるが、薄物(米坪が低いもの)では、強度を確保するため針葉樹(N)の BKP の配合を行なう。また紙を柔軟にし、印刷効果を高めるため、填料(白土)を 20%前後添加するほか、インクのにじみ防止のため、サイズ剤の添加や、紙の表面をなめらかにし印刷効果をあげるため、澱粉をベースとした表面塗工がなされている。

上質紙の中で書籍用紙は、目を疲れさせないため染料を使用しクリーム色等に行っている。また、筆記用紙は、インクがにじまず消しゴムを使ってもケバ立たないことが必要で、便箋用紙、ノート用紙などがある。紙に何か書くときに注意すべきことは、サイズ度の点である。サイズ度が強いとインクをはじいてしまう。また弱すぎるとにじんでしまう。万年筆、ボールペン、水性ペン、油性ペン、鉛筆等おのおの筆記適性にあう紙を使うことが必要である。

図画用紙には、鉛筆、木炭、水彩絵具等で描くのに適した特性を持たせてある。紙質はある程度固く厚みがあり、表面がある程度ケバだつてラフ質である。また製図、デザイン

用には、表面がなめらかな(平滑度の高い)ケント紙という紙が作られている。

また特殊なあるいは限られた用途向けのものとして図書館等で良く見られるインデックスカードやブリストル紙という上質厚紙、欧米の高級筆記用紙であるボンド紙などがある。」

(出所：王子製紙株編 2001『紙・パルプの実際知識第6版』東洋経済新報、87-8頁)

■ 本稿書誌情報

---

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

〔2020年度「文化社会学演習」WEB版報告書〕 <https://bungu-narajo.org/>

---

2020年8月1日

編集・発行：国立大学法人奈良女子大学文学部

人文社会科学文化メディア学コース

小川伸彦研究室編

---

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 E-mail [ogawanobuhiko@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:ogawanobuhiko@cc.nara-wu.ac.jp)

---